

# G・S 科

## における深い学びに到達した児童像

柱① 情報の分析	柱② 考えの形成 ・再構築	柱③ 既習・新知識 の活用	柱④ 課題発見
<b>深い学びポイントとの関連</b>			
3自力 4協働	3自力 4協働 5練り上げ	2見通す 3自力 4協働 5練り上げ	1つかむ 2見通す 6メタ認知
◇発表の型を決めずに、自分が話しやすい形を自分自身に選択させたため、自分が本当に伝えたい内容を吟味し、話すことができる。	◇相手からの質問を受けて、それに答えることによって、自分が伝えたいことと、相手が知りたいことの差を認識し、自分の考えを再構築することができる。	◇単元計画や振り返りシートを共同編集にすることで、自分の学びの調整を自分でできる。	◇相手の話を聞くことによって、自分では思いつかなかった話し方に気づき、自分の発表にも取り入れることができる。

### 児童像の実現のために効果的だった手立て

#### 【学びの自律化・個別最適化】

- ◇ 振り返りシートに共同編集機能を活用し、自分と他者の学習状況や成果を共有し、児童自身が学習の自己調整をできるようにする。

#### 【学びの自律化】

- ◇ 思考ツールを活用した、自分が伝えたいことの情報整理

#### 【探究化】

- ◇ 本単元のゴールについて、教師がモデルを示し、そのゴールに到達するために、児童がお気に入りの人についての情報を整理したり、発表したりする活動で働かせた「見方・考え方」を具現化し、学習を進めるにつれて自分がどのようなことができるようになったか、学習到達度として児童に見えるようにする。

## 実践の成果(○)と課題(▲)

- 児童が間違いを恐れずに英語を話すことを意識させたため、積極的に活動に参加することができた。  
振り返りの時間を長くとることで、自分一人で考える時間を設け、自分が本当に伝えたいことを、相手意識をもちながら再構築することができた。
- 児童の間違いをリキャストによって修正させることで、児童が話すことに苦手意識をもたずに、コミュニケーション活動を行うことができた。
- 単元を通したルーブリックを提示することで、児童が前時と本時、次時への見通しをもって授業に参加することができた。
- ▲ プレゼンテーションで自分の伝えたいことを相手にきちんと話すことができた一方で、相手側から質問を受けることができなかった。  
⇒自分が本当に伝えたい情報を吟味し、相手に質問をさせることで、自分が伝えたい内容と、相手が知りたい情報の差を埋められるようにする。
- ▲ Why に対する答えを発表者がうまく答えられていなかったため、どうしてその人物がお気に入りなのか理由をうまく伝えることができなかった。  
⇒自分がどうしてその人物を好きになったのか、英語で考える時間の設定をする。